

## 長生きする老人の条件

——特別養護老人ホーム・梅寿荘<sup>1)</sup> 在老老人の社会心理学的研究——

片 野 卓\*

### Condition of the Long Lived Aged

——Social Psychological Study of the Aged living in Baijuso;  
the Special Nursing Home for the Aged——

Takashi KATANO

(昭和56年9月28日受理)

……日々、死に直面しつつ生きている老人は、ある種の強さがあるということである。たしかに老人は肉体的に弱っている。したがって老人をいたわることは理に適ったことであるが、しかしだからといって老人のことをただ可愛想だと思うのは間違っている……。

老人はしかし、案外精神的には強いものである。彼らには どこか 芯の強い ところがある。それは“しぶとさ”とか、“したたか”と形容したいようなものである。

土居健郎「老人の死生観」<sup>2)</sup>

### は じ め に

本稿は、施設老人に関する既発表拙3論、「老人の“死にゆく過程”と“適応”に関する社会心理学的研究」(79)、「老人の“死にゆく過程”と精神・心理的ケアの必要性」(80)、「老人ホーム職員の処遇姿勢に関する研究」(81)<sup>3)</sup>の第4論に当るものである。

特別養護老人ホームにおける老人の死にゆく過程には、「社会死→精神死→身体死」のプロセスがみられることを実証したのが第1論であり、第2論ではそれを精細に追跡し、いわゆる「身体的障害」より「精神・心理的な障害」が重層かつ続発していく事実を実証した。したがって第1論では老人の生命維持のための「施設への適応」を重視すべきこと、つまり職員は入所老人の施設適応に主点を置いた処遇が必要であることを強調したが第2論では老人の「死への適応(安らかな死)(死の受容)」へいざなうための精神・心理的ケアが重要であることを主張した。

第3論では、全国の老人ホーム生活指導員を対象とした「処遇姿勢」の実態(意識)調査を実施し、その結果旧来の「老人を保護・収容し“指導する”」といった姿勢の指導員は減少しつつあるが、私立(法人立)より公立系の職員に、未だそうした意識から脱け切れない人たちが多くことや、若年・高学歴層、そしてキリスト系施設の職員が老人のニーズに即した近代的な“サービスの”姿勢をもっていること等々を実明した。

本稿は、上記3論を基礎仮説としたものであるが、とくに第1論での長命維持、すなわ

ち老人の「施設への適応」に焦点をおき、「長生きする条件」について追試しようとするものである。

## I 目的・対象・方法

イ) 目的——まず、社会心理学的な立場からの「適応 (adaptation)」という言葉の意味を述べておきたい。簡潔に言えば、適応とは「自分を生かしつつも環境に調和してゆく生き方」をいうのであり、順応 (accomodation) が「自分を殺しても環境に合わせようとする」とはかなり意味合いがちがっている。したがってある意味では、環境——この場合主として人間関係の環境をいうのであり、物的環境を指すのではない——さえもインボオルブし (巻き込んで) 変容させていく主体的な強さ、すなわち土居氏のいう“しぶとさ”や“したたかさ”に通じるものがある。

本研究は、特養ホームで長期に生存している老人群のもつ施設適応力、つまりこうした意味での個有な「強さ」が、どのへんにあるのかを社会心理学的側面から探ろうとするものである。一つは彼らの社会的側面に関する実態調査から、二つは臨床的な意識調査を通して。

ロ) 対象——1) 先回調査 (S53.3.31 現在) 時の長期生存老人群 (入所5年以上の生存者, 28名) と今回調査 (S56.3.31 現在) の超長期生存老人群 (入所8年以上の生存者, 19名。彼らは梅寿荘開設以来の生存者である) との実態比較。2) 今回の臨床面接による意識調査 (S.56.6.1 現在の長期生存老人群——5年以上の生存者) 44名中調査可能の28名 (他は言語障害とか、調査時に身体その他の悪化などにより不能)。

ハ) 方法——上記1) の実態については、先回調査と同様に「健康管理簿」や「寮母日誌」などによって社会的側面からの事実関係をリサーチした。2) の意識調査は、吉村可那江 (主任寮母) が老人のベッドサイドで“自由な雰囲気”のなかで、調査票をもちつつ語りかけて聴取り調査を行なった (本年7月10日より2週間)。また調査票<sup>4)</sup> は、吉村、森正一 (生活指導員) および片野の三者によって作製したものである。

## II 調査結果

### 1) 実態調査から

先回調査での過去6年間弱の死亡者の在所年数は、第1表のごとくであり、入所1年未満の死亡者が実に50%を占めたが、拙第1論ではこれをⅡ群 (短期死亡者群) と仮称し、

第1表 死亡者96名の在所年数  
(S.47.8~53.3)

|             | (名) | (%)  |
|-------------|-----|------|
| 1 年 未 満     | 48  | 50   |
| 2    "    " | 24  | 25   |
| 3    "    " | 11  | 11.5 |
| 4    "    " | 7   | 7.3  |
| 5    "    " | 3   | 3.1  |
| 5 年 以 上     | 3   | 3.1  |

第2表 死亡者56名の在所年数  
(S53.4.1~56.3.31)

|             | (名) | (%)  |
|-------------|-----|------|
| 1 年 未 満     | 11  | 19.6 |
| 2    "    " | 5   | 8.9  |
| 3    "    " | 4   | 6.8  |
| 4    "    " | 4   | 6.8  |
| 5    "    " | 10  | 17.9 |
| 6    "    " | 10  | 17.9 |
| 7    "    " | 10  | 17.9 |
| 8    "    " | 1   | 1.6  |
| 9 年 以 上     | 1   | 1.6  |

5年以上生存のⅠ群（長期生存群）との社会的・精神的・身体的な3つの側面からの比較を行ない、先記のように社会死→精神死→身体死の移行過程がみられることを実証した。

これを逆にいえば、施設側の処遇姿勢のあり方如何によって、身体死（自然死）はともかく、社会死や精神死（精神障害）をかなりな点まで予防可能だということになる。事実、今回の調査によってみると（第2表）、入所1年未満での死亡者は激減し19.6%にすぎない。また、前回調査の1年未満とはいえ、梅寿荘が開設されたのがS.47年8月、集計は48年3月末日のわずか6カ月間を区切って行なったものである。

今回の調査時に、その点の理由を当荘関係者から聞き込みを行なってみたが、それによるとだいたい次の4点に要約できるようである。以来（拙第1論発表以来とくに）、①入所希望老人にたいして、施設側が自主的にある程度選択するようになったこと。つまり健康安定度の低い老人の場合は、病院等へ紹介するとかその他の方法を取り、お断りするようになった。②設備の改善が著しくすすんだこと。たとえば電動式ベッドが導入されて以来、体位交換が自由になり、起座位を保つ時間が長くなったために、テレビの観賞や同室者との会話が頻ぱんに行なわれるようになった。そのため、精神上の遅滞をくい止めることができるようになり、また床ずれによる合併症（感染症）なども予防することが可能となった。③医療機関との連携を密にし、入所後の入院や治療をすみやかに行なうようになった。そしてなによりも重視したいのは、④直接処遇職員の専門性が非常に高められて、技術的にもいちじるしく向上したこと、である。

前田大作氏（都老人総合研究所）の行なった調査（都内10カ所特養の1年間の全死亡者180名対象、'80年10月・老年社会科学会発表、'81年10月）によれば、自分から直接施設に入所した老人の、いわゆるリロケーション・エフェクト（社会死）はみられなかったようであるが、梅寿荘の場合にも上記のような改善策が進み、ある程度、前田氏の指摘するような状態になってきているといえる（老人の生きてきた社会的背景——都市型、農村型など——や調査方法の相違など問題は多いが、ここではふれない）。

しかし、今回調査の梅寿荘における1年未満死亡者11名について調べてみると、入所直前に同居家族がなく、また社会的に自立した生活（早くから独身となり、かつひとり住まい）を送っていた人はわずか1名（男、死因は胃ガン）だけであり、他の10名はすべて同居家族があり、家族への依存心の強い人たちがばかりであった（資料略）。

以下、施設内で「長生きする老人」の「社会的条件」について、(1)「入所直前の居処」、(2)「同居家族の有無」、(3)「面会の頻度」、(4)「家族への依存度」の順に分析をすすめていきたい。

くり返すが、「前回」とはS.53年3月31日現在、「今回」とはS.56年3月31日現在を指す。

#### (1) 入所直前の居処

第3表は、前回と今回の調査結果を対照したものである。前回でも明らかにされたように、自宅以外の病院とか施設などから入所した老人のほうが、長生きしている人が非常に多かった（60%）が、今回の調査ではさらに多く（68%）、しかも彼らは施設開所以来8年間という超長期的な生存者であった。

#### (2) 同居家族の有無

前回では、最終的に頼るべき同居家族の無い老人のほうが長生きしている人により多いこと（約2倍）が明らかになったが、今回の超長期生存老人の調査では、さらに明確に（約6倍）なった（第4表）。

第3表 入所直前の居処

| 生存年数<br>居処 | 先 回  |     | 今 回  |     |
|------------|------|-----|------|-----|
|            | 5年以上 |     | 8年以上 |     |
|            | (名)  | (%) | (名)  | (%) |
| 自 宅        | 13   | 40  | 6    | 32  |
| 病 院        | 14   | 44  | 10   | 53  |
| 施 設        | 15   | 16  | 3    | 15  |
| 計          | 32   | 100 | 19   | 100 |

第4表 同居家族の有無

| 有無 | 先 回 |     | 今 回 |     |
|----|-----|-----|-----|-----|
|    | (名) | (%) | (名) | (%) |
| 有  | 11  | 34  | 3   | 16  |
| 無  | 21  | 66  | 16  | 84  |
| 計  | 32  | 100 | 19  | 100 |

### (3) 面会の頻度

面会の頻度が多いことはそれだけ施設外の人たちとのコミュニケーションが保たれ、精神衛生上も好ましいことであり、施設側でも入所時の付添いのない人たちに「せめて週1回は」と説得しているが、入所期間が長びくと次第に面会は少なくなる。が、それとは別

第5表 面会の頻度

| 頻度    | 先 回 |     | 今 回 |     |
|-------|-----|-----|-----|-----|
|       | (名) | (%) | (名) | (%) |
| 月4回以上 | 0   | 0   | 2   | 11  |
| 〃3～4回 | 9   | 28  | 1   | 5   |
| 〃1～2〃 | 16  | 50  | 5   | 23  |
| 殆んどなし | 7   | 21  | 11  | 58  |

の次元で、事実上、長期生存者には面会の頻度が少ないか全くない老人のほうが多いことがわかり(前回)、いささか驚かされたものであった。しかし、今回の調査ではそのことがいっそう明らかになった(第5表)。面会頻度が少ない(月1～2回と殆んどなしの計)老人は前回で71%、今回はさらに増えて81%である。

### (4) 家族への依存度

第6表は家族への依存度をランク付けたものである。たとえば処遇者に電話とか手紙その他の方法を通して家族との接触の希望を依頼するとか、事実上家族喪失の状態におかれていても同様主旨のことを訴えたりすることながら、健康管理簿や寮母日誌によって収集し層化したものである。

ここでも、長生きする老人は、家族への依存度が少ない(「弱い」と「殆んどなし」の計)ことがわかるが(前回65%、今回62%)、8年以上生存の老人では「殆んどなし」が半数を占めている。

第6表 家族への依存度

| 度合    | 先 回 |     | 今 回 |     |
|-------|-----|-----|-----|-----|
|       | (名) | (%) | (名) | (%) |
| 強 い   | 4   | 13  | 2   | 11  |
| 普 通   | 7   | 22  | 5   | 26  |
| 弱 い   | 8   | 25  | 2   | 11  |
| 殆んどなし | 13  | 40  | 10  | 52  |

### <考 察>

以上を要約してみると、施設内で長生きする老人には一定のパターンがあり、それは拙第1論でも述べたように、いわゆる「家離れ」や「子離れ」ができた人たちに、土屋氏のいう“したたかさ”や“しぶとさ”に通じるある種のパーソナリティ特性をもった人たちではないかということである。そして少なくともそれは、施設入所以前にかなりの程度社会的に形成され、また入所以後にも種々な施設内トラブルを経過しつつ、徐々に補強強化された特性ともいえるだろう。

### 2) 意識調査から

この調査は、入所老人の社会的諸属性(年齢や家族、職業歴、その他)や、身体的・精神的諸要素(ADLや知的能力、その他)および「宗教観・死生観」、「施設生活」、「生活歴」

などに関する諸要素とのクロス集計によって得られたものであるが、本項では紙数の関係もあり、長期生存老人群（今回の調査時点で5年以上生存の）と「施設生活」との間にみられた5点の意味的な面にしぼり、また「宗教観・死生観」については簡単に述べるだけに止め、詳細は次回にまわしたい。

### (1) 施設生活満足度

これは、「今の暮らしをどう思っておられますか」という設問にこたえてもらった結果である。

第7表 満 足 度

| 度合      | とても幸せ |     | まあまあ幸せ |     | どうともいえない |     | 不幸せ |     | とても不幸 |     | 計   |     |
|---------|-------|-----|--------|-----|----------|-----|-----|-----|-------|-----|-----|-----|
|         | (名)   | (%) | (名)    | (%) | (名)      | (%) | (名) | (%) | (名)   | (%) | (名) | (%) |
| 5 年 未 満 | 10    | 23  | 14     | 32  | 10       | 23  | 9   | 18  | 1     | 4   | 44  | 100 |
| 長期生存者   | 12    | 43  | 8      | 29  | 6        | 21  | 2   | 7   | 0     | 0   | 28  | 100 |
| 計       | 22    |     | 22     |     | 16       |     | 11  |     | 1     |     | 72  |     |

第7表の下欄の計をみればわかるように、全体として「とても、まあまあ」幸せと感じている老人が多く、不幸せという人は若干いるにすぎない（とくに5年未満では18%）。

これを、幸せ（「とても」と「まあまあ」の計）と不幸（「とても」もふくむ）に単純化したのが第8表である。つまり、5年未満に比べ、長期生存者は圧倒的に（72%）施設生活を満足と感じており、逆に不幸せとす

第8表 満 足 度

|         | 幸 せ |     | どうともいえない |     | 不 幸 せ |     |
|---------|-----|-----|----------|-----|-------|-----|
|         | (名) | (%) | (名)      | (%) | (名)   | (%) |
| 5 年 未 満 | 24  | 55  | 10       | 23  | 10    | 22  |
| 長期生存者   | 20  | 72  | 6        | 21  | 2     | 7   |

る人は少ない（7%）。長生きする老人は、徒らに未来（？）や過去にとらわれずに現実生活に満足を見出しているような人（適応型）に多いという事実注目したい。

### (2) 郷愁感の有無

これは、「前に住んでいたところへ戻りたいと思われますか」という設問にこたえてもらったものである。

第9表の下欄の計でわかるが、全体としては、郷愁感は概して少ないといえる。また、入所5年未満の老人は、長期生存者に比べ郷愁感の強い人が多い。

第9表 郷 愁 感

|         | よくある |     | 時々ある |     | あまりない |     | 全然ない |     | 計   |     |
|---------|------|-----|------|-----|-------|-----|------|-----|-----|-----|
|         | (名)  | (%) | (名)  | (%) | (名)   | (%) | (名)  | (%) | (名) | (%) |
| 5 年 未 満 | 4    | 9   | 19   | 42  | 5     | 11  | 17   | 38  | 45  | 100 |
| 長期生存者   | 0    | 0   | 9    | 32  | 4     | 14  | 15   | 53  | 28  | 100 |
| 計       | 4    |     | 28   |     | 9     |     | 32   |     | 73  |     |

第10表 郷 愁 感

|         | あ る |     | な い |     |
|---------|-----|-----|-----|-----|
|         | (名) | (%) | (名) | (%) |
| 5 年 未 満 | 23  | 51  | 22  | 49  |
| 長期生存者   | 9   | 32  | 19  | 68  |

これを、ある（「よくある」と「時々ある」の計）とない（「あまりない」と「全然ない」の計）に簡約化したのが第10表である。すなわち、長期生存者には、5年未満の在所者よりも郷愁感のない老人のほうが非常に多く（68%）、逆にある人のほうが少ない（32%）。現実生活密着型といえよう。これは、前項の施設生活満足型と相応するパターンでもあり、興味深い。

## (3) 行動意志の有無

これは、「死ぬまでに何かしておきたいことや行ってみたいことなどありますか」とい

第11表 行動意志の有無

|         | あ る |     | な い |     | 計   |     |
|---------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
|         | (名) | (%) | (名) | (%) | (名) | (%) |
| 5 年 未 満 | 19  | 43  | 25  | 57  | 44  | 100 |
| 長期生存者   | 16  | 57  | 12  | 43  | 28  | 100 |

う設問の有無をたずねたものである。何らかの心残りの事柄にたいする整理意欲の有無ともいえようか(第11表)。

この表によれば、長期生存者と5年未満とを比較して大差はないが、やはり長期生存者に行

動意志のあるものが多く、比率が全く逆関係を示している。

## (4) 悩みを打ちあける相手

これは、「悩みごとは主に誰れに打ちあげますか」という設問にこたえてもらったものであり、④「施設長や事務長」⑤「指導員」⑥「看護婦」⑦「寮母」⑧「家族」⑨「ホームの友人」⑩「昔の友人や近所の人」⑪「ボランティア」⑫「福祉事務所の人」⑬「その他」の10項目の回答を用意した。しかし、ここでは煩雑さをさける意味から④～⑨までを「ホームの職員」とし、「家族」と「ホームの友人」はそのまま、⑩～⑬までを「外の知人」、また「その他」はそのままとして集計した(第12表)。

第12表 悩みごとを打ちあける相手

| 相手      | ホームの職員 |     | 家 族 |     | ホームの友人 |     | 外の知人 |     | そ の 他 |     | 計   |     |
|---------|--------|-----|-----|-----|--------|-----|------|-----|-------|-----|-----|-----|
|         | (名)    | (%) | (名) | (%) | (名)    | (%) | (名)  | (%) | (名)   | (%) | (名) | (%) |
| 5 年 未 満 | 21     | 48  | 5   | 12  | 1      | 2   | 1    | 2   | 16    | 36  | 44  | 100 |
| 長期生存者   | 11     | 39  | 2   | 8   | 0      | 0   | 0    | 0   | 15    | 53  | 28  | 100 |
| 計       | 32     |     | 7   |     | 1      |     | 1    |     | 31    |     | 72  |     |

全体としてみると、悩みを打ちあける相手は「ホームの職員」である(内訳では32名中「寮母」が28名で圧倒的に多い)が、わずか1名の差で「その他」が多い点に注目したい。しかもそれは5年未満と比べて長期生存者に多いばかりでなく、彼らの場合(長期)は「ホームの職員」(39%)よりも「その他」が非常に多く(53%)、異常と思われるほどである。

臨床的な面接によってその点を尋ねたところ、彼らは(5年未満も同様)、「悩みなんてものはない」とこたえるものが多く、ある意味では深層心理的にかなりポジティブな——楽天的なというか“アッケラカン”というべきか、いずれにしても表現し難い——感情を底流としてもっているかに思われた。

## (5) 施設内での親しい友人の数

これについては、「ホームの中に親しい友人が何人位ありますか」の設問に、④5人以上⑤4～5人⑥2～3人⑦1人だけ⑧あまり親しい人がいない⑨全然友人がない、以上6項目に分け回答してもらった

が、これも煩雑さをさける意味で④～⑨までを「数人」、⑩はそのまま、⑪～⑬を「いな

第13表 親しい友人の数

|         | 数 人 |     | 1人だけ |     | いない |     | 計   |     |
|---------|-----|-----|------|-----|-----|-----|-----|-----|
|         | (名) | (%) | (名)  | (%) | (名) | (%) | (名) | (%) |
| 5 年 未 満 | 4   | 9   | 15   | 34  | 25  | 57  | 44  | 100 |
| 長期生存者   | 6   | 22  | 4    | 14  | 18  | 64  | 28  | 100 |
| 計       | 10  |     | 19   |     | 43  |     | 72  |     |

い」として集計した（第13表）。

全体でみると、施設老人には親しい友人がいない（持てない？）ことがはっきりする（第13表）。かりに「数人」と「1人だけ」を合せて「いる」としてみた場合は29名、「いない」が43名であり、その比は40対60となり、過半数の老人が親しい友人のない施設生活を送っていることが明らかである。

また、長期生存者のほうが5年未満の老人より、そうした友人がいない人が若干多いこともわかる。

#### ＜考 察＞

さて、以上5項目の設問を通してえられた長命老人の意識には、なにか共通したものがみられよう。一言にしていえば、先述したような“アッケラカン”としかいい得ないような心的特性である。

施設内でとくに親しい友人がいて、その一人に一方的に依存従属してゐるわけでもなく、「悩み」といわれるようなものもあまりなく、かりにあるとしても施設の寮母に打ち明け得るし、入所以前の過去の生活に徒らにこだわることもない。現在の施設生活を充分楽しみ幸福だと感じるような、楽天的かつポジティブな心情の持ち主であることは確かである。だからこそ、死ぬまでにしておかなければならないことがあるという意志が生じるような人に、より長命な老人が幾分多くみられるのではなかろうか。

#### （8）そ の 他

本項では、上記（意識調査）のような楽天的な老人の心情と、彼らの「宗教観・死生観（感）」との間の関係をかたんに記し、補足しておきたい。ただし、対象者は上記の長期生存老人に限定せず、梅寿荘在所老人全員（110名）中、調査可能だった73名（設問によっては回答不能者もあり、各項すべて72名とはかぎらない）についてのもの（男20%、女53%）であり、在所年数の内訳は第14表のごとくである。

第14表 在所年数

|           | (名) |
|-----------|-----|
| 1 年 未 満   | 12  |
| 2   "   " | 14  |
| 3   "   " | 9   |
| 4   "   " | 5   |
| 5   "   " | 5   |
| 5 年 以 上   | 28  |
| 計         | 73  |

第15表 神仏の有無と幸福度

| 神仏  | 幸 せ |     | どうとも<br>いえない |     | 不 幸 せ |     | 計  |
|-----|-----|-----|--------------|-----|-------|-----|----|
|     | (名) | (%) | (名)          | (%) | (名)   | (%) |    |
| あ る | 37  | 64  | 11           | 19  | 9     | 15  | 57 |
| な い | 4   | 57  | 3            | 42  | 0     | 0   | 7  |
| 不 明 | 3   | 42  | 1            | 14  | 3     | 42  | 7  |
|     |     |     |              |     |       |     | 71 |

#### a) 神仏の有無と幸福度

先ず「神さまや仏さまがあると思うか」についてであるが、「ある」と思っている人は79%、「ない」は10%、「不明」は9%である。

こうした「神仏の有無」と「幸福度」との関係を示したのが第15表である。つまり、神仏の存在を認めている老人のほうが、認めていない人や不明とこたえた人より、施設生活を幸福と感じている人に多いことが明らかである。とはいえ、神仏の存在を認めていない老人が不幸だというのでもなく、事実、不幸福感をもつ人は皆無である。注目したい。

また、「お祈りする時、何を一番お願いするか」との設問については、半数近い（47%）老人、（とくに女性）は「自分の幸福」、つぎが「家族の幸福を」（16%）であり、「先祖の

冥福を」はわずか9%にすぎない。さらに驚かされたのは、「死後の幸福を」願う老人は皆無だということである。「その他」(26%)では大部分の人たちが「早く死ぬるように」とお祈りし、「お願いするものがない」とする人も若干あったことをつけ加えておきたい。

#### b) 靈魂の有無と幸福度

先ず、「死んだら人間はどうなると思うか」についてであるが、多い順にあげれば、「魂が死後の世界へ行く」(34%)、「何もなくなる」(30%)、「不明」(20%)、「魂がこの世に残る」(15%)であり、いずれにせよ「魂の存在(死後の世界へ行く、この世に残る)」を認める老人は半数弱(49%)おり、「魂の存在を認めない(何もなくなる)」という無心(神)論者とみなされるような老人も3割弱存在している。とくにそういう傾向は男性に多い(男55%, 女20%)。

さて、「魂の存在を認めない」老人と「認める」老人とを、上記のように分類してみたのが第16表である。

第16表 靈魂の有無と幸福度

| 靈魂   | 幸福  |     | どうとも<br>いえない |     | 不幸せ |     | 計   |     |
|------|-----|-----|--------------|-----|-----|-----|-----|-----|
|      | (名) | (%) | (名)          | (%) | (名) | (%) | (名) | (%) |
| 認めない | 17  | 81  | 3            | 15  | 1   | 4   | 21  | 100 |
| 認める  | 19  | 54  | 10           | 29  | 6   | 17  | 35  | 100 |
| 不明   | 8   | 53  | 2            | 13  | 5   | 33  | 15  | 100 |

ここで明らかなことは、いわゆる「無心(神)論」老人のほうが、「有心(神)論」老人に比べ、幸せな人がはるかに多く(81:54)、逆に不幸な人が少ない(4:17)という事実である。

#### c) 死後観と幸福度

「死後の世界があるとしたらそれはどんな世界だと思うか」については、「不明」(60%)、「明るく楽しい世界」(23%)、「この世と同じような世界」(7%)、「色のないフワフワした世界」(5%)、「暗くていやな世界」(2%)の順であり、「不明」を除き死後の世界についてのイメージをもっている老人のうち、半数以上がポジティブなイメージをもっている。とくに「明るくて楽しい」イメージをもっているのは女性に多く、「不明」は男性に非常に多かった。

また、死後の世界を「明るく楽しい」とイメージしている老人は、施設生活を幸せと感じている人に多く(58%)、逆に不幸せな人に非常に少ない(5%)。が、「不明」の老人にも幸せの人が多い(67%)。(表、省略)

#### d) 希望する臨死期の場所と人物

最後に、「どこで」また「誰れにみとられて死にたいか」についての、願望についてふれておきたい。

先ず死にたい「場所」であるが、「ホームで」という老人は47名(64%)、つぎが「家族のいるところ」の13名(17%)であり、「その他」8名(10%)、「病院」5名(6%)であった。「ホームで」と願う老人が非常に多いのはともかく、「家族のいるところ」がわずか17%であるのは何故であろうか。子どもがいないからか。しかし、現実には子どもがいる老人は73名中41名(56%)もあり、いない人が32名(44%)なのである。

こうした子どものある老人だけに限って、死にたい場所についてみてみたのが第17表である。

第17表 子どものある老人と希望する臨死期の場所

| 場所    | ホーム |     | 家庭  |     | 病院  |     | その他 |     | 計   |
|-------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
|       | (名) | (%) | (名) | (%) | (名) | (%) | (名) | (%) | (名) |
| 子どもあり | 27  | 65  | 8   | 19  | 3   | 7   | 3   | 7   | 41  |

この表でわかるように、現実には子どもがありながら、臨死期に家庭を希望する老人はわずか8名(19%)にしかすぎず、大方の老人がホームを希望している(65%)という奇妙な事実をどう解釈したらよいのだろうか。在所老人の背後にある複雑な家族関係に想いを馳せるべきか。また逆に、上述してきたように家族よりも施設生活に適応し、「家離れ」し得た老人の生きざまとみるべきなのであろうか。

場所についてはともかく、彼らはいったい、最後は「誰れにみとられて死にたい」と願っているのだろうか。場所とはちがって、みとられて死にたい人物はやはり「家族」であり、これは72名中49名、つまり68%を占め、「姪母」は17名(23%)であり、「昔の友人」と「施設長」が各1名、他はゼロであった。(表、略)

物理的な環境としての死に場所は近代的な諸設備の整っている施設で、しかし最後をみると欲しい人物はプライマリーな家族に、と願う老人のリアルな感覚、いわば冒頭から述べてきた「したたかさ」や「アッケラカン」とした老人個有の強さに起因したもの、といつて過言ではあるまい。

## おわりに

老人に関する二、三のエッセイは書いたことはあったが、半ば本格的(?)に老人問題に取り組むようになったのは、筆者が奈良大学に赴いた78年4月以降のことである。赴任当初の数日間、当大学理事長・辻村泰圓先生(当時、故人)が兼務されていた梅寿荘に泊めていただき、特養ホーム老人と直かに接触、また職員諸氏と語らって以来のことである。

施設老人に関する拙論は、以来、3編とも当「紀要」に掲載させていただいた。が、本論脱稿後の筆者の心情の奥には、昨年までとは微妙かつ重大な相違が生じつつあるのを実感している。紀要論文にはふさわしくないかもしれないが、卒直に述べさせてもらいたい。

冒頭に土居健郎氏の文章を引用させていただいたが、それは筆者の自戒の意味をこめたものであり、かつ本研究の背骨を貫く「事実」でもあった。土居氏はさらに、「私には、従容として老年の衰えを甘受し、日々死と対面しつつなおも生き続ける老人の方が、いっそう尊敬に値するように思われる。そこにこそ若者に真似のできない老人の強さがある。実際、老人個有の強さを無視した精神衛生対策は、その背後に社会の実権を握る若者たちの老人に対する侮蔑を隠している」と指摘し、また「われより先がけ、われわれよりもはるかに深刻に、死と対面し孤独に耐えている事実の故でなければならない。老年の死生観こそ本物である」と述べている。侮蔑ではもちろんないが、筆者の心情の奥の奥には、一種の「老人軽視観」が秘んでいたことを反省したい。

最後に、老人のベッドサイドで、文字通り臨床的な聴取り調査を行なってくれた共同研究者、吉村可那江氏の報告書(未公開)の1部を紹介し、謝意を表したい。「はじめ私たちはインタビューの時間を15分から20分位と考え、食後のくつろいだ時間をえらんでおり

ました。ところがどのお年寄りも常々心の中に溜っていたことを一気に吐き出すかのよう  
に、堰を切って語って下さるので……40分、50分を費すことは稀ではありませんでした。  
不幸だった結婚生活のこと、夫と別かれ子どもを育てるために死ぬような苦しい思いをし  
たお話、青年期に重い病気にかかり通学を断念したことなど、どれもこれもその人のパー  
ソナリティに大きな影響を与えたに違いないと思われるような、重大な人生のことばかり  
でした。たしかに、そうした苦しみ乗り越えて、現に70歳、80歳という高齢に達してお  
られるお年寄りには、やはりそれなりの哲学があるようでした。しかし、つい日常の忙し  
さにかまけて、そうしたお年寄りの心の裏をのぞくこともなかったため、つい表面的なこ  
とばかりに眼を奪われ、時には偏見をもってその人の行動を批判することもなかったとは  
いえません……」

機械的な面接調査ではない臨床調査の雰囲気や、寮母として日常的な処遇を行ないつづ  
ラポールを深めたうえでのリサーチであることを汲みとっていただければ幸いである。ま  
た、「私たちはお年寄りといえば、単純に地獄や極楽を信じていられるという、安易な既  
製概念でみてきたきらいがあるのではないのでしょうか。今回の調査でもそう予測してい  
たところがあります。ところが意外なことに、『神さん、仏さんはあると教えられてきたか  
らそうしとくだけや』とか、……『人間死んだら何んにもなくなるんや』『生きている間  
だけが人間や』とか、無神論ともいえるこたえがジャンジャンと返ってきて、私たちの先  
入観はこっぱみじんになってしまうのでした。そして驚くことに、そうした考え方のもち  
主はたいいてい、大きな障害を負いながらも、見事にそれを乗り越えて自分らしく生きる姿  
勢を身につけておられる人、つまり社会的自我が成熟し、精神的な自律を果しておられ  
る……」と述べているが、数的処理に主点をのいた拙稿より、ある意味ではより切実な老  
人の姿が浮彫りにされ、貴重なレポートといえる。

今回もまた、本研究のために調査フィールドを惜しみなく提供して下さったばかりか、  
ご協力の労を与えて下さった宝山寺福祉事業団理事長兼梅寿荘施設長・辻村泰範氏はじめ、  
データー処理のための労（電算機）をとって下さった下西製作所社長・下西巖氏の各氏に  
厚く感謝申上げる次第である。

#### 注

1. 特別養護老人ホーム・梅寿荘は、社会福祉法人・宝山寺福祉事業団（理事長・松本実道氏、奈良  
県生駒市元町）の社会福祉事業の一貫として昭和47年8月・故・辻村泰範氏によって創立されたも  
のである。ベット数110、エレベーターバス、喫茶コーナー、陶器焼成窯、ミニゴルフ場、寝台付き  
輸送車等の設備や付設診療所などもあり、寮母25名（看護婦3）その他の職員をかかえている。な  
お、同事業団は、梅寿荘の他に児童福祉法による愛染寮、極楽坊保育園、宝山寺児童遊園、いこま  
保育園、いこま乳児院、いこま乳児保育園、仔鹿園、平城野外流動研修センター、また社会福祉事  
業法による療育相談施設・奈良仔鹿園など計10カ所の経営を行なっている。
2. 土居健郎「老人の死生観」（老年学）医学書院、P.271.
3. これらの拙稿3論は、いずれも奈良大学紀要、第7号、第8号、第9号所収。
4. 調査票紹介。

#### フェイスシート

|       |        |         |     |           |
|-------|--------|---------|-----|-----------|
| 氏 名   | 性別     | 年令      | 才   | 職業        |
| 入 所   | 年 月 日  | 在 所 年 数 | 年   | （月数は四捨五入） |
| 身元引受  | ①子または孫 | ②親類     | ③知人 | ④福祉 ⑤その他  |
| 出 生 地 | 県（     | 才まで）    | 学歴  |           |

両親との関係 実父 ①生別 ②死別 本人 才  
 実母 ①生別 ②死別 本人 才  
 養・義父母関係の経験 無 有 同居 年間 (義父母には舅姑を含む)  
 結婚歴 無 有 回 ①生別 回 ②死別 回  
 子供 無 有 男 人 女 人 現存 男 人 女 人  
 入所前 ①同居 ②別居 現在の交流 無 有 ①面会 ②手紙 ③電話  
 ADL 排泄 歩行 摂食 言語  
 精神・心理的障害 無 有 症状 ①妄想 ②徘徊 ③不潔行為 ④抑うつ  
 ⑤暴力行為 ⑥その他  
 知的能力 ①正常 ②やや低下 ③低下 ④痴呆

A) 宗教と死について

- 1) 神さま、仏さまはありますか。
 

①あると思う ②ないと思う ③わからない
- 2) おまいり（お祈り）する時、何を一番おねがいしますか。
 

①自分の幸福 ②家族の幸福 ③死後の幸福 ④先祖の冥福 ⑤その他
- 3) 神さま、仏さまにお願い（お祈り）して、救われたことがありますか。
 

①よくある ②時々ある ③あまりない ④全然ない ⑤お願いしたことがない
- 4) 信じている宗教がありますか。
 

①無 ②有 宗教名 教
- 5) 死んだら人間どうなるといいますか
 

①何もなくなる ②魂がこの世に残る ③魂が死後の世界へ行く ④わからない
- 6) もし死後の世界があるとしたらそれはどんな世界だと思いますか。
 

①明るくて楽しい世界 ②色のないフワフワとした世界 ③暗くていやな世界  
 ④この世と同じような世界 ⑤わからない
- 7) 何処で死にたいと思いますか。
 

①ホーム ②病院 ③家族のいるところ ④その他
- 8) 誰にみとられて死にたいですか。
 

①家族 ②ホームの友人 ③昔の友人、近所の人 ④寮母 ⑤看護婦  
 ⑥指導員 ⑦施設長（事務長） ⑧宗教関係の人 ⑨その他  
 ※⑥⑧は特定の人のある、なしも聞く
- 9) 死ぬまでに何かしておきたいこと、行ってみたいところなどありますか。
 

①ない ②ある（具体的に）
- 10) もし生れ変われるとしたら、今の性に生まれたいと思いますか。
 

①今の性 ②ちがった性 ③人間以外のもの（例えば花、鳥、魚など具体的に）

B) 施設生活について

- 1) 今のくらしをどう思っておられますか。
 

①とても幸せ ②まあまあ幸せ ③どうともいえない ④不幸せ  
 ⑤とても不幸せ
- 2) 前に住んでいたところへ戻りたいと思われることがありますか。
 

①よくある ②時々ある ③あまりない ④全然ない
- 3) どんな時それを最も強く感じますか。
 

①身体の具合の悪い時 ②入所者間の人間関係がうまくいかぬ時  
 ③職員とうまくいかぬ時 ④その他

5. 上掲「老人の死生観」P.272

The conclusion of the research shows the following facts: in respect to (1) above mentioned, many of these long lived aged people have long since been detached from their sons and daughters, in other words, their families, which is another saying that they have developed their own 'social ego'. In respect to (2), a good many of them 'are independent of their past and circumstances about them' and

moreover 'have perseverance in their solitude' and 'feel their life in the nursing home happy'

This paper is a part of the after researches of my previous two reports about "Dying Process" of the aged in nursing homes and "Atitude of the Nursing Staff".

"View about religion and notion about life and death" are to be reported briefly in this paper, but details will be published next.